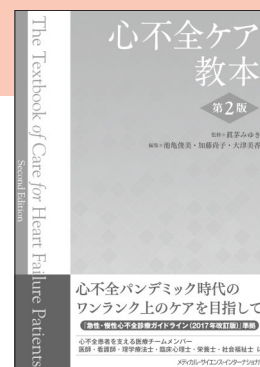


心不全ケア教本 第2版

眞茅みゆき／監修

池亀俊美・加藤尚子・大津美香／編集



B5判 424頁 2色刷
定価：本体4,600円＋税
2019年6月 MEDSi刊

評者 山科 章 東京医科大学名誉教授/東京医科大学医学教育推進センター特任教授

平均寿命は年々伸びており、それに合わせてわが国の高齢者人口も年々増加している。65歳以上の人口は3500万人を超え、その半数が後期高齢者（75歳以上）であるが、2025年には団塊の世代全員が75歳を超える。一方で、高齢化率（人口に占める65歳以上の割合）も確実に増加しており、2018年には28%を超えた。究極の超高齢社会であり、疾病構造あるいは疾病背景も変化している。

超高齢社会で問題となるのは、悪性腫瘍ではなく、心不全、心房細動、脳卒中、慢性腎臓病（CKD）、COPD、認知症、フレイルである。これらの疾病は単独で存在せず、併存し、さらに、患者背景、家族背景、社会背景が複雑に絡む点が重要である。とくに心不全は“心不全パンデミック”とも呼ばれ、急激に増加しており、高齢者の common disease とも言われており、高齢者の疾患のコアになる可能性がある。

高齢者の心不全を診るにあたっては、“心不全の病態と診断・治療法”が中心の従来の教科書では役に立たない。ケアの概念とチーム医療の実践が必須である。全てのメンバーが患者を中心にしてお互いに最適なケアはできないが、最近では患者をチームの一員とするという考え方も導入されてきている。

そういった視点で書かれたのが、本書、『心不全ケア教本 第2版』である。その主な視点は、“チーム医療”、“その背景をふくめて全人的に診る”、“現場で役立つケア”、の3点である。初版は2012年に上梓された。その後、心不全看護認定看護師の増加に並行するように、心不全ケアは進歩している。

評者は日本心不全学会チーム医療推進委員会を監修者の眞茅みゆき先生と一緒に2012年から6年間担当し、心不全チーム医療を主眼にした教育セミナーを年4回、全国各地で開催した。その間、セミナーは年々進化し、心不全の病態、診断から治療、ケアの実践、薬物および栄養管理、デバイス管理、心リハ、在宅医療、緩和ケア、問題症例、介護者への支援、心不全チームビルディング、ACP（意思決定支援）まで、時代のニーズに対応してテーマは広がり、深まっていった。

本書も、初版から7年を経て、セミナーで討議したような新しい考え方、エビデンス、具体的なケアの紹介が必要となり、第2版の発行となった。新たに、緩和ケア、ACP、家族関係の章が追加された。また、その間に発表された、2016年の「高齢心不全患者の治療に関するステートメント」、2017年の「急性・慢性心不全診療ガイドライン（改訂版）」、2018年の「心不全患者における栄養評価・管理に関するステートメント」も分かりやすく紹介されている。何よりも、心不全患者をケアするための知識、チーム医療を進めるノウハウがちりばめられている。現場の視点で書かれている理由は、執筆者の多くに心不全看護認定看護師が関わっているからだと思う。

心不全の幅広い領域で、それぞれ、かなり深いレベルまで書き込まれている。心不全の診療に関わるすべての医療スタッフだけでなく、すべての領域で患者中心の疾病管理、チーム医療を始めようとする診療グループにも一読をお勧めしたい。沢山の目からウロコがあるはずである。